

<実践報告>

子どもが命の大切さを実感する授業設計の試み

鈴木邦明 横浜市立青木小学校

An Attempt to Design the Class Where Children Can Realize the Importance of Life

SUZUKI Kuniaki: Aoki Elementary School, Yokohama City

|               |  |
|---------------|--|
| 研究の目的         | 命を大切に子どもを育成するための試行実践を行い、教科や道徳などの学習をどのように関連させることが有効かを明らかにする。  |
| キーワード         | 命 小学校 総合単元的学習  |
| 実践の目的         | 総合単元的学習による命の学習   |
| 実践者名          | 鈴木 邦明  |
| 対象者           | 神奈川県横浜市立A小学校6年生(31名)   |
| 実践期間          | 2005年6月～11月  |
| 実践研究の方法と経過    | 小学校6年生に対して、命に関する学習を総合単元的学習として取り組んだ。道徳を中心として、理科、体育、国語の教科で取り組んだ。時間は合計20時間(道徳8時間、理科1時間、体育1時間、国語10時間)で取り組んだ。   |
| 実践から得られた知見・提言 | 命についての学習を教科横断的に子どもが取り組みやすい内容から順に積み重ねて学習を続けたことで、子どもがスムーズに学習に取り組み、互いを思いやる気持ちなどを育てていた。<br>自分と他者を意識して考えていく機会を何度も作ったことで、自分の行動が他の人に与える影響に気づき、自分のこれからの行動をしっかりとコントロールしていこうとする姿が見られた。 |

## 1. 研究の概要

### 1.1 はじめに

現代の子ども達にとって実感をもって命を感じることは難しくなっている。社会状況、自然環境などの変化などから、都会の子どもは勿論、自然に恵まれていると考えられる田舎の子どもでさえ、実体験の中から命を感じるものがなくなりつつある。

子どもの世界では、テレビゲームやインターネットの普及により、バーチャルな世界での闘い、殴り合い、殺し合い等が日常的に行われている。現実社会での経験が豊富でない子ども達にとっては、リアル(現実)な世界とバーチャル(ゲーム機等での仮想現実)な世界の混乱が起こることもあるであろう。バーチャルな世界においては、痛み、苦しみ、悲しみ、温かさなどを感じることができない。ゲームの中で、相手を殴り殺しても、そこには痛みや体の温かさ・冷たさ、臭いなどは存在しない。門脇(1999)は、テレビはすでにわれわれの日常生活の空気のような存在になっており、そんなテレビを子ども達が毎日数時間視聴し続けた場合の累積効果は相当なものであるはずである。テレビ視聴を続けることによってもたらされる子どもの社会化異変を軽視してはならないだろうと述べている。

また、近年、子ども達の遊びの際の人数にも変化が見られている。以前は鬼ごっこ、ボールゲームなどの様々な集団遊びが一般的に見られていた。しかし、最近はテレビゲームの普及などにより遊び方が室内でのゲームなどが中心となってきている。そのこともあり、少人数での遊びが多くなってきている。その少人数での遊びに関しても、テレビゲームなどを行うことが多い。岡田(1998)は人間の成長にとって大切な子どもの頃に、多くの時間機械に向かっていることは問題であると述べている。そのゲームも一人でプレイしていることが多く、人との関わりが非常に少ない。この様に以前ならば当たり前であった遊びの中での人との関わりが希薄になってきている。異年齢の集団遊びの中では、年上(強い者)が年下(弱い者)のものをいたわる事や世話をする事、我慢すること、皆と一緒に楽しむための協調性やルールを守ることなど将来社会の中で暮らしていくために必要なことをたくさん学んでいた。この人との関わりの経験の少なさが、子ども達が生活している様々な場面で起こるトラブルの原因の一つにもなっている。

このような時代に生きる子ども達に、命に対しての実感を持たせたい。生きている物に触れること、自分の誕生について親から聞いてみることで、人にばい菌扱いされた時の心の痛みを知ることで、これらのどれもが現代を生きる子ども達に必要なことである。実際の体験の中から得た感覚がとても大切である。これは道徳の時間だけでできることではなく、体育、理科などの教科は勿論、全ての学校教育活動の中で獲得していく必要のあるものである。

心身共に健全な子どもの育成には、命について自ら正しく判断し、行動できる能力を育てていくことが大事である。特に道徳において、命の尊さについて学習することなどが大事である。そうした活動の積み重ねの中で、命の大切さ、人間の尊厳性を自他共に実感させていきたいと考えた。

## 1.2 研究の目的

- ・命を大切に子どもを育成するための試行実践を行い、教科や道徳などの学習をどのように関連させることが有効かを明らかにする。

## 2. 研究の実際

実践1「道徳・理科」命の誕生，食物連鎖 3-1)自然愛，環境保全

アゲハチョウの幼虫の成長を題材にして (6月14日 2時間扱い)

実践2「道徳」生命の尊重 命の不思議さ 3-2)生命尊重

ダウン症児に関するビデオを題材にして (6月30日 2時間扱い)

実践3「体育」

病原体と病気 (7月7日 1時間扱い)

実践4「道徳」いじめ 2-3)友情・信頼，助け合い

鹿川君の事件を題材にして (10月21日 2時間扱い)

実践5「道徳」 2-2)思いやり・親切

言われて嫌な言葉 (11月2日 2時間扱い)

実践6「道徳」差別 4-3)公正・公平，正義 (11月8日 1時間扱い)

実践7「国語」平和

平和について理解を深め，自分の考えを発信する (12月初旬 10時間扱い)

### 2.1 実践1 <道徳・理科の実践から>

単元名：「かけがえのない命」 3-1)自然愛，環境保全

ねらい：命はかけがえのないものであることを知り，自他の生命を尊重しようとする心情を育てる。(道徳)

アゲハチョウの幼虫の発育について知る。(理科)

活動：①教室で卵から育てていたアゲハチョウの幼虫の発育の様子を知る。

②無事成虫になることができなかった幼虫についての意見を出し合う。

③命のはかなさ，かけがえの無さについて考える。

ポイント：動物の話題から始め，最後には自分自身の話題へとつなげていきたい。子ども自身が自分の成長に目を向けることは機会が少ない。動物の成長に関する学習をきっかけに，自分自身の成長にも目を向け，命のはかなさ，かけがえの無さについて考えさせたい。

### 2.2 実践2 <道徳の実践から>

単元名：「生命の尊重・命の不思議さ」 3-2)生命尊重

ねらい：ダウン症児が成長していく姿を取めた映像を見て，命の尊さ，不思議さについて

考える。

活 動：①ダウン症についての基礎的な知識を知る。

②ダウン症児が成長していく姿を取めた映像を見る。

③命の尊さ、不思議さについて考える。

ポイント：資料にはNHKが製作した「たった一つの宝物」という45分間の番組を使用した。内容は様々なダウン症の人が様々な苦勞をし、成長をしていく姿を撮ったドキュメントである。その中で、色々な病気を併発し、幼くして死んでしまう子どもが中心的に描かれている。子ども達にとっては当たり前である「不自由なく歩けること」、「遊べること」、そして「生きていられること」の意味を考えさせたい。

### 2.3 実践3 <体育の実践から>

単元名：「病原体と病気」

ねらい：病原体がもとになって起こる病気の予防には、病原体を体の中に入れないこと、体の抵抗力を高めておくことが大切であることを知る。

活 動：①欠席調べから休みの原因を考える。

②病原体が体の中に入ると病気になることを知る。

③病原体を体に入れないためにはどうすればよいか考える。

ポイント：この授業を行う際、子どもの身近な部分の内容からねらいに迫りたい。自分たちのクラスの欠席調べから授業に入ることで、問題を自分自身のこととしてとらえやすくなる。また、病原体などは眼に見えにくいものが多く、実感を持つことが難しいので、顕微鏡で撮った写真を提示したり、菌を培養したものを見せるなどの工夫が必要だろう。

### 2.4 実践4 <道徳の実践から>

単元名：「いじめ」 2-(3)友情・信頼、助け合い

ねらい：中学生がいじめによって自殺してしまった事件について知り、自分の身近なことを振り返り、これからの自分の行動を考える。

活 動：①鹿川君が自殺してしまった事件についての経緯を知る。

②鹿川君の同級生だった岡山君が8年後に事件を振り返って書いた手記を読む。

③自分自身のこととしていじめについて考える。

子どもの感想：

○岡山君の証言を読んで自分の印象に残ったことは何でしたか？

- ・やっている人は遊びでもやられている人がつらかったり、悲しんでいるということはいじめになってしまうので、僕はやられている相手が悲しいと思うことをしない。
- ・いじめていないけれど、見ていていじめを止められないのもある意味いじめなんだと思った。
- ・岡山君が「自分は悪くない」などとよくありそうな文章を書くのではなく、自分が弱

い人間であることを知られるのが死ぬほど嫌だったという自分の批判をしていることがすごいと思った。

- ・自殺というのは本人が自ら命を絶つと思っていましたが、他人によって間接的に殺されていたのだと思いました。
- ・岡山君は強いと思う。自分の弱さを知り、皆にこうしてそれを伝えている。

ポイント：事件の経緯を伝えるには、当時の新聞記事を使った。事件の経緯を知った後、直接的な加害者ではないが被害者の親友であった岡山君が8年後に書いた手記を読んだ。そして、いじめとはどういうものなのかということ子ども達に考えさせた。人が死んでしまう程のいじめの経緯、また、そのいじめのすぐそばにいた人の気持ちを知ることはいじめの深刻さ、無意味さを子ども達に考えて欲しいと考えた。そして鹿川君の事件と自分の日頃の行動との接点を探し、望ましい行動について考えていた。資料の例をもとにして自分自身の行動や思いについて子どもが考えたことで、真剣に取り組むことができたのだと思う。

考察：自分と他者を意識して考えることができていた。自分一人だけでは、いじめは成り立たず、いじめられる人といじめる人の双方がいることでいじめが成り立つ。今回、いじめというテーマの中で、他者というものを意識することができていた。自分の行動が他の人に与える影響に気づき、自分のこれからの行動をしっかりとコントロールしていこうとする姿が見られた。

## 2.5 実践5<道徳の実践から>

単元名：「言われて嫌な言葉」 2-(2)思いやり・親切

ねらい：自分が言われて嫌な言葉を書き出し、それを学級全体で考えることで、人を大切に  
にする気持ちを育てる。

活動：①自分が言われて嫌だった言葉を思い出し、簡条書きにする。

②出された言葉をまとめて一覧にしたものを書き写す。

③今後言葉遣いをどの様にしていくことが望ましいのか考える。

子どもの感想：

① 皆から出された「言われたらと嫌な言葉」を全て書き写してみてどう感じたか？

- ・悲しい。
- ・こんなにひどい言葉があったとは知らなかった。
- ・みんなこんな嫌な言葉を言っていたのかと思った。
- ・もう使いたくないと思った。
- ・こういう言葉を聞くととても嫌だ。
- ・自分が思っていた以上にひどい言葉があったので、びっくりした。
- ・書き終わって読み返すと自分が誰かに言われているような気がした。

## ② これからどうしていききたいか？

- ・自分も言っていることがあったのでやめたい。
- ・これからはもっと言葉を選んで使いたい。
- ・言ってしまうくせを直していく努力をしたい。
- ・どんな言葉も言われて嫌な言葉なので言わないようにしたい。
- ・言わないようにしたいし、言われないようにしたい。

ポイント：この学習では、自分が言われて嫌な言葉を確認し、自分の行動を考えていくというものである。ポイントは、皆が出したたくさんの言われたら嫌な言葉を、自分で書き写すという点である。印刷したものが渡された場合と空欄に自分自身で書き込んでいく場合とでは、子どもの受け取り方が大分違ってくる。子どもの感想に、「書いていると嫌な気持ちになった。」「書き終わって読み返すと自分が誰かに言われているような気がした。」などあるように実感を持って感じている。

今回の学習で、子どもから出された自分が言われて嫌な言葉は次の通りだった。

「ばか、死ぬ、くそ、あっちいけ、汚い、けがれる、殺すなど」(多く出されたもの)

考察：この学習を行い、子ども達は初めてこれだけのたくさんの言われて嫌な言葉が自分達の身の回りであることを気付いた。子ども達の思っていた以上に多くの言葉があった。それらの言葉の中に、自分自身が普段の生活の中で何気なく使っているものが多数含まれていることに気付いた。一人の子どもが「言われたくない」「言わないようにしたい」と書いているように、自分と他者というものを考えることができていた。

## 2.6 実践6<道徳の実践から>

単元名：「差別」 4-(3)公正・公平、正義

ねらい：差別について考える。自分の身近なことと世界全体に関わることの双方の差別の問題について考える。

活動：①人をばい菌扱いすることについての考えをまとめる。

②教師が一人一人の子どもを実際にばい菌扱いし、その時の気持ちをまとめる。

③世界であった様々な差別について知る。

④自分に身近な所での差別、身近でない所での差別の両方を意識しながらこれからの自分の行動を考える。

子どもの感想：

①実際に自分がばい菌扱いされてどう感じたか？

- ・つらかった。自分が言われて嫌なことは他の人にはしない方がいいと思った。
- ・自分がばい菌扱いされると普段自分が人にやっていることがとても分かった。
- ・自分の時々相手に言ったりしたりしていたので、相手の気持ちが分かった。
- ・少し腹が立った。ありえなかった。みんなからあの行動をされている人がどういう気

持ちなのか少し分かったような気がする。

- ・自分が仲間外れになった気分で嫌だった。自分が嫌われているような感じだった。
- ・もてあそばれていた気がして少しいら立った。つきはなされた気分になる。

②身近な差別や世界での差別について話を聞き、これからどうしていこうと思いましたが

- ・みんな平等なんだと思いました。色々な話があったけれどみんな平等にすれば戦争はないと思いました。これからは戦争のない世界を築いていきたいです。
- ・昔も今も差別があることを初めて知った。小さな差別でも大きな差別でも変わらないのだと思った。これからは気をつけようと思う。
- ・差別って本当に怖いと感じた。私の身近なところから差別がなくなっていけばいいなと思った。
- ・世の中では色々な差別があつてびっくりした。でも、私がやっている〇〇菌とかも同じ差別だと分かったからこれからは人を差別せずに同じ人間どうし仲良くしたい。
- ・今慣れているとずっとそのようになってしまうから直そうと思った。
- ・これからは人の気持ちを考えて行動したい。こんなに身近で色々なことが起きているのは初めて知った。
- ・この勉強をして差別はこんなに恐ろしいことが分かった。差別がこんなにたくさんの人をぎせいにするなんて初めて知った。だからこれから差別をしないようがんばる。

ポイント：子どもがばい菌扱いされることを実体験することが重要である。なんとなく正論を言ったり、書いたりするだけでは、なかなか子どもの心情に訴えていくのは難しいと考える。実体験し、自分自身が考えるきっかけを得た後に問題をじっくりと考えさせたい。今回、身近な差別としては「人をばい菌扱いすること」、世界的、日本全国的なレベルの差別としては「アパルトヘイト」「第二次大戦時のユダヤ人迫害」「部落問題」などを取り上げた。

考察：身近な差別を実感を伴い経験することで、子どもは他人事としてではなく、自分に関係のあることとして差別についての理解を深めていた。今回、自分自身が身近な所で起こっている差別(人をばい菌扱いすることなど)を体験し、差別への意識を高めた上で、人種差別や部落問題などについて考えていった。その事で子ども達はスムーズに学習に取り組むことができていた。人種差別などの学習に取り組む際、子どもがそれらの問題を自分とは関係のない世界で起きている問題ととらえてしまうことがよくある。そうになってしまうと子ども達の考えが一般論や理想論になってしまったり、あいまいなままで終わってしまうことがある。そうではなく、子ども達が実感を持って、自分の問題として差別について考えていくことが必要である。命の学習など単に知識の獲得を目指すものでない学習において、今回の学習の様に、まず自分のこととして問題をとらえ、その上でさらに大きな問題についての理解を深めていくというパターンでの学習は有効であろう。

## 2.7 実践7 <国語の実践から>

単元名：「平和について考えよう」

ねらい：平和についての文章を読み、自分自身の考えを深める。そして、自分の考えを伝えていく。

活動：①国語の教科書にある教材文「平和のとりでを築く」を読み、平和についての理解を深める。

②相手、内容、方法についてよく考えながら、平和についての自分の思いを伝えていく。

ポイント：道徳で取り組んだ「差別」「いじめ」「平和」などの内容にも意識が向くように働きかけた。戦争や核問題など世界規模や日本全国規模の話題といじめや差別など子どもにとって身近な話題の双方を意識しながら平和についての自分の考えを深められるように働きかけた。

## 3. 研究のまとめ

### 3.1 全体のまとめ

#### (1) いじめと命について

今回授業でも扱ったいじめと命の関係はとても重要な問題である。学校現場にいて日々子ども達と接して感じてくことは、いじめの多くは、いじめを行っている人がそれ程深刻に考えず、軽い気持ちで行っているということである。軽い気持ちで行っていたことが集団の中で質が変化したり、いじめを受けている人の様々な状態の変化などにより、いじめが深刻化する。最悪のケースは鹿川君のように自殺にまで至ってしまうこともある。そこまで行かなくとも深刻な問題に陥っているケースは多数あるだろう。

また、「言われて嫌な言葉」という実践も子ども達の日常を振り返るには有効だった。子ども達の間では「ばか、死ね、うざい、消えろ、きもい」などの言葉が飛び交っている事実がある。テレビのバラエティ番組などの影響もあるのだろう。これは先に書きたいじめと同様子ども達はそれ程大きな意味をもって言っている訳ではないようである。気軽に言っており、それが習慣になっている子どもも多いように感じられる。この授業は、そういった日常を見直し、自分自身の行動を見つめ直す良い機会になっていた。授業後しばらくの間、子どもから出た「言われて嫌な言葉」を教室内に掲示した。以前と比べ、それらの言葉を使うことは減った。そして、言ってしまった場合には友だちが掲示してあるものを示して「それは言うてはいけないだよ」などと声掛けをしている姿が何度も見受けられた。

子どもの中で、いじめや差別が行われている状態は、決して命を大切にしている状態とは言えないだろう。人の存在を尊重することができていることが大事である。違いを違いとして認めること、そして互いを大事にしていくことができる関係(集団)作りをしたい。これは、他の人を大切にすることだけでなく、自分自身をも大切にすることである。「他の



人を大切にすること」「自分自身を大切にすること」を、表面的に捉えるのではなく、しっかりと心に刻む経験をすることが大事である。これは人が生きていく上でとても重要なことである。

## (2) 子どもが接する資料の質について

道徳の学習を行う際、できる限り良質な資料を用意するようにしたい。これは全教育活動に共通のことで、道徳の学習に限ったことではないが、特に道徳ではそれが重要となる。今回の学習における実践2のダウン症に関する映像、実践4のいじめをやめさせることができなかつたことについて述べている手記などはとても質の高い資料である。良質な資料を用意することが、その授業全体の質を左右すると言える。齊藤(2005)はいじめに関する授業を行う際、いいテキストに出会わせることが重要であり、いいテキストを共有し、それについて語り合うことで理解が深まると述べている。良質な資料は、文章でも、映像でも、また人が直接話すという形でもよいであろう。戦争について実際に戦争に行った人に話をしてもらうことなどは、資料として非常に優れたものである。道徳の授業を行う際、資料の選択に十分な配慮をすることが、授業の質を高めることのとても重要なポイントである。

## (3) 総合単元的学習について

今回、命についての学習を道徳を中心として、体育などの時間も使って、総合単元的学習として取り組んだ。命についての学習など道徳的内容のものは、生活の様々な場面で取り組んでいく必要がある。算数の計算や国語の漢字などはやり方や形を知り、覚えることが学習となる。しかし、道徳的内容は、単に知るだけでなく、そこから行動に移していくことも大事である。その為には、学習が道徳の時間に留まらず、学校生活の様々な場面を通して学んでいく必要がある。

今回の授業では、「命の誕生 → 生命尊重 → 病気 → いじめ → 差別 → 平和」という順で学習に取り組んだ。考える対象を自分だけではなく、他者を意識したものへも取り組むことができていた。図1に示したように今回の学習では、他者は身近な友だち、家族から町、国そして世界へと徐々に自分から遠い存在のものへと学習を進めた。学習を進める際には、自分、他者の両方を大事にする心情を育成することが大事である。自分の命だけを大切にする姿勢でも、他者の命だけを大切にする姿勢でもどちらでも問題がある。両方をバランス良く、大事にしていこうとする心情の育成がとても大事となる。学校での命に関する学習においては、このバランスを上手に保つことが難しい。

自分の命に眼を向け、その大切さ、すばらしさについて考えることを始めのステップとし、少しずつ他者の存在を意識できるような内容の学習を重ねていく。そうした中で子どもは、自他の命を大切に思う心情が育まれていた。

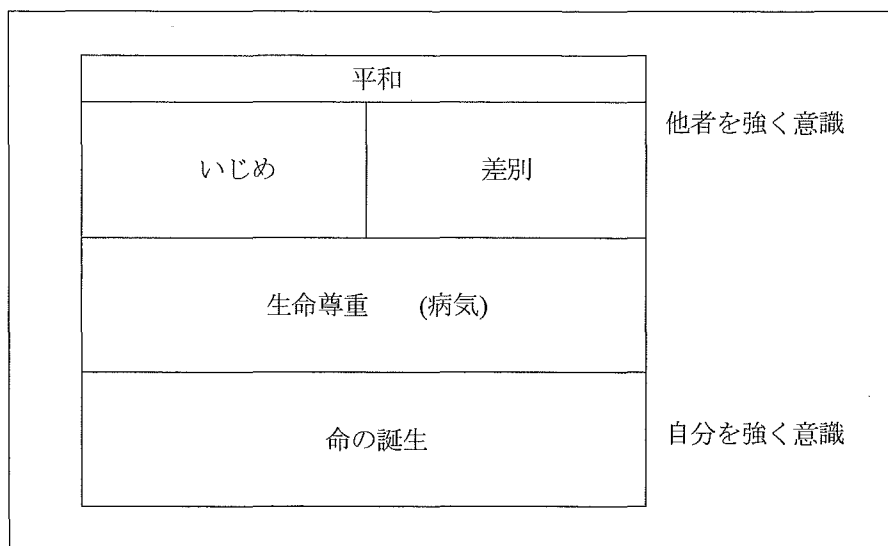


図1 命に関する学習の積み重ねと自他の意識の関係

### 3.2 研究の成果

- ・命についての学習を子どもが取り組みやすい内容から順に積み重ねて学習を続けたことで、子どもがスムーズに学習に取り組み、互いを思いやる気持ちなどを育てていた。
- ・自分と他者を意識して考えていく機会を何度も作ったことで、自分の行動が他の人に与える影響に気づき、自分のこれからの行動をしっかりとコントロールしていこうとする姿が見られた。

### 3.3 今後の課題

- ・子どもが学習の中で得たことを日常生活の中で持続させていくことが難しかった。
- ・今回の実践は小学校6年生で行ったが、他の学年でも同様に取り組み、成果や課題を整理することでさらに授業の質が高まるだろう。
- ・実践1の「命の誕生」において、もっと自分自身の誕生に目を向けることにじっくりと取り組みたかった。そうすることでこの学習のベースとなる自分の命のすばらしさや大切さの部分をふくらますことができただろう。

### 文献

宇都宮直子, 2005, 「死」を子どもに教える, 中央公論新社, p.15

岡田永治, 1998, なぜキレル, 産能大学出版部, p.15

門脇厚司, 1999, 子どもの社会力, 岩波書店, p.13

斉藤孝, 2005, 友だちいないと不安だ症候群につける薬, 朝日新聞社, p.120

(2006年4月30日 受付)